



第百十五號 (第十一卷) 昭和五年十一月

“ナンセンス天文学”

ごく小数のいはゆる専門家を除き、大多數の本誌讀者にとつては天文学は一種のナンセンスである。ナンセンスであるが故に、今日のやうな忙はしい世の中にも多くの人々の心を惹きつけるのであつて、「だから、ナンセンスでは無いのだ」と言ふ人があるかも知れないが、しかし、高尚なナンセンスといふものは皆此のやうなものである。

「火星に人は棲んでゐますか？」之に對して、「棲んでゐません」と答へれば話は其れでおしまひとなるが、若し「棲んでゐます」と答へたと考へて御覽なさい。問ふた人は、それで如何しやうとするのであるか？ そのほか、「月の見えない半面は？」、「天の星の數は？」、「宇宙は無限か有限か？」等々。皆之れ等は然りと答へても、否と答へても、實の人生には何とも無いものであつて、全く百バセントのナンセンスである。しかし、かうした疑問や興味は、世の總ての人が皆一度は持つのであるから、不思議と言へば不思議、人の世は——世の中の人々の動きは、ほんとうに、ナンセンスばかりだ。

ところが、世の中からナンセンスなものを皆取り除いて見たとしたら、如何だらう？ 天空から月や星は先づ最初に姿を消すことだらうが、地上に於いてさへ、「あれはナンセンス」、「これもナンセンス」と、一つづつ取り除いて行かうちに、遂には、食卓の御馳走も、散歩の時の美服も、人の笑ひ聲も……………何もかも消えて無くなつて、「これでサツパリ、清々しくなつた」と喜ぶ人が稀にはあるかも知れないが、多くの人々は、「いや、ど

うも殺風景な世の中になつたワイ」と、淋しがるに違ひない。

こんどは、上のことの逆に、世の中にはナンセンスものばかり残して置いて、ナンセンス以外のあらゆるものを取り除いたとしたら如何なる!? 此の時こそ、人は皆は名譽も地位も實利も全く打ち忘れて、小兒の如くほがらかに、笑ひ聲に溢れ、喜びと楽しみに充ち満ちて、地球世界はさながらの樂園となつて了う。

ナンセンス天文學を楽しむ我が同志は、それだけ、世の人々を置き去りにして樂園と幸福への一步先きに進み行く人では無からうか?

天文學の——殊に近代の天文學のいはゆる進歩は皆ナンセンスから出發してゐる。第十九世紀の初め、ドイツ國の天文學者ベツセルの一人の弟子は、ひそかに太陽の黒點を觀測をしてゐる所を先生に見つけられ、『いやしくも天文家たるものが、太陽の黒點など見てゐて、どうするつもりか?!』と叱られて了つた。又、同じ頃、英國では官立のグリニチ天文臺の近くに、手製の反射鏡を据えて、毎夜、音樂會での演奏の疲れを、星の觀測によつて慰められつゝあつたハーシエルが居た。彼等の天文學は實に自由なナンセンス天文學であつた。そして、世の人から叱られ、笑はれ、嘲けられ、疎んぜられた。ところが、第二十世紀の、今の天文學は抑も何であるか? 太陽黒點は天體活動の中心問題と化し、大宇宙の研究は天文の尖端を代表するものとなつて了つたではないか!

こんなことを考へて見ると、何が何だか分らなくなつて了う。只、明らかに愉快なことは、天文學がナンセンスなものであること、又は、ナンセンスから新舊の天文研究が生れて來た事實である。

世の人々よ! 第二十世紀の經濟萬能の社會に巢食つてゐるとは言へ、すべてに餘り打算的な、餘り機械的な生活に、時々はホリデーを與へよ。ナンセンス天文學に歸れ! そして其所から出發し直せ!

口 繪 寫 眞 說 明

去る十月六日、本山彦一翁の一行、花山天文臺に來訪、臺員たちと共に本館露臺で、澄みわたる秋天の名月を賞觀す。